

はじめに

わたしが「自分らしく」生きようと決めたとき、いちばん邪魔をしているものはなんだろうと考え抜いて、そして出た答えが「お金」でした。

それと共に、自分がそれまでどれだけお金に縛られ、振り回されてきたのかに気がついたときに、愕然としました。

裕福ではない家庭で育ったのも大きいと思います。

末っ子のわたしが生まれたのと同時に共働きだった母親は、学校教師を辞めて専業主婦になりました。同じく教員だった父親1人の稼ぎで、3人の子どもを大学に行かせ、一人暮らしの仕送りまでしていたわけですから、当然贅沢とは無縁な家庭でした。

わたしは、小さい頃から買いたいもので値段を気にせず買ったことなど一度もありませんでした。

大学の一人暮らしはもちろん節約暮らし、その後、劇団に入り、貧乏暮らし。いかにお金を使わずに済むか、まずはそれがベースでした。

その後、家庭を持ってもすべてのレシートを管理し、子どもの通帳に毎月いくら入れて、食費にはいくら使えて、美容室には何カ月おきに行けるだろうか、まあ「お金」のためにどれだけの時間を費やしてきたことか。

そんな生活しか送ってこなかったわたしが「自分らしく」生きたいと心底思ったとき、「お金」という物質に自分がこんなに振り回されているって、どれだけ「お金」って偉いのよ！ って気がついちゃったんですね。

そして、「お金」という物質から自由になろうって決めた瞬間にわたしが一番ワクワクしたことは、「読みたい本を心の赴くままに買うこと」だったのです！
自分でもこんなに嬉しいことだなんて知りませんでした。

わたし、本には苦手意識がすごかったですね。

まずは、小学校で本を読む冊数を競う行事が当然のようにありました。葉っぱを貼ってどのクラスが一番生い茂っているかを競うのです。さほど興味もない本を競争のため

に読みました。

そして、たまたま兄がものすごく本を読む人で、「学校の本をすべて読んだんだ」と言っている親の言葉を聞いて、勝手に比較されると感じていました。

さらに、実家には山ほどある本。実家を出てずいぶん経ってから気がついたのですが、兄たちとわたしの部屋を仕切っていたのがすべて本棚だったのは普通ではなかったのかもしれません。

本に興味がない劣等感しかなかったわたしが、それは単に「自分の好きな分野」の本に出会えていなかったただだと気がついたのです。いや、そこにベールを被せていたのですね。

自分が好きなことに壁を作らず「お金」を使おうと思ったときに、心も一緒に開放されたのです。

本を自由に見ること、一番の喜びを感じたわたしに、一番びっくりしたのはわたしだったのです。

興味のあることがどんどん深く知れる。わたしの知欲を満たしてくれる。

首がもげそうなくらいなずいたり、声を出して涙を流したり、心の底からうなづいたり、羨望の眼差しを向けたり、枕元に置いてみたり。

たった1500円前後の「本」にこんなに勇気をもらって、その人のすべての想いや莫大な時間をかけて養った知識や情報を教えてもらって、本ってなんて素晴らしいんだって何度思ったことか。

それってやつぱり、自分の好きにちゃんと向き合って、素直にお金を使ったからなんですよね。

わたしをそんなふうに楽しませてくれた本に、いつかわたしも誰かの背中を押せるような本を出せたらいいなと思うのは自然の流れでした。

わたしが舞台に立ったのも、「自分らしく生きる」メッセージを伝えたかったから。

わたしがカウンセラーになったのも、その人が「その人らしく生きる」背中を押したかったから。

そして、わたしが本を書きたいのも、同じ理由です。

なぜならば、自分らしく生きるのが、わたし自身とても大変だったから。

自分の心に素直に生きるのが、大変なところ（地球）だからこそ、誰かの背中をそつと押したい。

大変なのはわかっている。だからこそ、誰かの力になりたい。
わたしができることで。

そんな本になつたらいいなと思つて精いっぱい綴りますね。

どこかの誰かの「心のお守り」になれたら、こんなに嬉しいことはありません。

ピーラー・ピロコ